【 7 】

氏　　名	宮　崎　　泉（みや ざき いずみ）
学位(専攻分野)	博　　士（文　学）
学位記番号	文　博　第　122　号
学位授与の日付	平成11年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科宗教学(仏教学)専攻
学位論文題目	アティーシャの菩提心説研究
論文調査委員	(主査) 教授 御牧克己　教授 徳永宗雄　教授 荒牧典俊

論　文　内　容　の　要　旨

「はじめに」(pp. vii-x)

アティーシャ（Atīśa, 982－1054）はチベットのいわゆる後期仏教伝播期に重要な役割を果たした人物である。チベットの伝承によれば，29歳の時に大衆部の上座であったシーララクシタ（Śīlarakṣita）から具足戒を受けた。その時の戒名がディーパンカラシュリージュニャーナ（Dīpaṃkaraśrījñāna）である。その後，根本四部の三蔵の大部分を聴聞し，『大毘婆沙論』も聴聞した。多くの師から波羅蜜乗，金剛乗も聴聞し，中でもラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）について多くを聴聞した。また現在スマトラ島と考えられているスヴァルナドヴィーパ島に行き，ダルマキールティ（Dharmakīrti. Dharmapāla, Suvarṇadvīpaとも呼ばれる）に師事し，後にヴィクラマシーラの大上座となった。彼の名声はインドの内外におよび，ガーリー（mNa'ris）の王より招請され，1042年入蔵した。ガーリーではチャンチュプオー（Byaṅ chub 'od）の請願により『菩提道灯』(Bodhipathapradīpa, D. 3947, 4459, P. 5343, 5378）を著した。またラサではゴク・レクペーシェーラプ（rṄog Legs pa'i śes rab）の請願により『思択炎』(Tarkajvālā）の翻訳を行い，その際『中観優婆提舎』(Madhyamakopadeśa, D. 3929, 4468, P. 5324, 5326）や『中観優婆提舎開宝篋』(Ratnakaraṇḍodghāṭa-nāma-Madhyamakopadeśa, D. 3930, P. 5325，以下『開宝篋』と略称）を著した後，1054年チベットに於て没した。

本論文に於ては『開宝篋』を中心として菩提心説を中心に展開するアティーシャの菩提心説を明らかにした。

菩提心の修習に関して後期中観派に大きな影響を与えたのはシャーンティデーヴァ（Śantideva）の『入菩提行論』(Bodhicaryāvatāra）である。シャーンティデーヴァは同論において，「菩提心の利益」(bodhicittānuśaṃsa)，「菩提心の摂受」(bodhicittaparigraha）などの章を設け，菩提心を軸に修道体系を展開している。アティーシャも同書を頻繁に引用している。

アティーシャは，そのシャーンティデーヴァを受け継ぐと考えられる誓願（bodhipraṇidhicitta)，悟りへの出発（bodhiprasthānacitta）の二種菩提心説，また，二諦説に基づく勝義（paramārtha)，世俗（saṃvṛti）の二種菩提心説の二つの菩提心説を説く。本論文においては，このように分類される菩提心が修道体系の中でどのように位置づけられるか，またその菩提心がどのような機能，内容を持つかを明らかにした。

「第一章　アティーシャの立場」(pp. 1-11)

『菩提道灯細注』(Bodhimārgadīpa-pañjikā, D. 3948, P. 5344，以下『道灯細注』と略称）によれば，アティーシャはナーガールジュナ（Nāgārjuna)，アーリヤデーヴァ（Āryadeva)，チャンドラキールティ（Candrakīrti)，バヴィヤ(Bhavya)，シャーンティデーヴァ，ボーディバドラ（Bodhibhadra）と続く法灯の中に自らを置いている。このような立場をアティーシャは「大中」(dBu ma chen po）の語をもって表す。これが中観派を指すことは明らかであるが，アティーシャは「大中」の教義の内容を具体的に説明しないため，その内容を的確に把握することは難しいが，瑜伽行派の唯識説を取り込んだ後期中観派の特徴を持ったものであることはアティーシャの『道灯細注』や『中観優婆提舎』などの著作により

確認できる。

アティーシャは唯識派の論者の中でもアサンガ（Asaṅga）を特に重視し，論書としては『菩薩地』（Bodhisattvabhūmi）を重視している。アティーシャが同書をいかに重視していたかは，彼の直接の言及，引用，翻訳活動などから知られる。またアテイーシャがチャンドラゴーミン（Candragomin）作『律儀二十頌』（Saṃvaraviṃśaka）やアティーシャの直接の師匠でもあるボーディバドラが著した注釈『律儀二十頌細注』（Saṃvaraviṃśaka-pañjikā）を重視することも，『律儀二十頌』が『菩薩地』戒品の内容を二十頌にまとめたものであるという性格上，アティーシャが『菩薩地』を重視したことの一証左となろう。

また江島氏が二諦説を通じて指摘した『中観宝灯論』（Madhyamakaratnapradīpa）とアティーシャの密接な関係も，『開宝篋』に説かれるナーガールジュナの受記から確認出来る。特に『大雲経』（Mahāmegha-sūtra）の引用を通じたナーガールジュナの受記の比較を通じて『中観宝灯論』とアティーシャの強い結び付きが明らかになる。このことは，アティーシャが『中観宝灯論』に依拠して『開宝篋』を書いたか，少なくとも『中観宝灯論』と同じ系統に属していた事実を示している。

「第二章　アティーシャの著作概観」（pp. 13-27）

本章ではチベット大蔵経中観部に属するアティーシャの著作を修道体系の点から分類した上で概観した。まず，アティーシャの主著とされる『菩提道灯』と『道灯細注』を修道体系全般を主題とする著作とし，修道体系全般を内容とする小品群は一つにまとめた。ここにまとめた小品は修道体系を簡略に扱ったものであり，基本的な修道体系の構造は『菩提道灯』と等しい。次に，一つの主題からあるいは一つの視点から著された著作を一分類とした。一つの主題から著された著作とは二諦や菩提心などの個別のテーマを扱ったものである。歌や書簡も一つの視点から著された著作としてここにまとめた。これらの中観部に収められるアティーシャの著作のほとんどは，教義を説くことよりも修道体系を説くことに重きを置いている。このことからアティーシャが修道体系を説くことを主な目的として著作していたことは容易に想像できる。これはアティーシャが菩提心説を説く時も同様である。

「第三章　アティーシャの菩提心説」（pp. 29-73）

本章に於ては菩提心説を主題とする『開宝篋』を用い，また『道灯細注』も補助的に援用しつつ，アティーシャの菩提心説を考察した。『開宝篋』は内容上，「Ⅰ．菩提心の必要性とその根拠」「Ⅱ．菩提心詳説」「Ⅲ．仏，菩薩について」「Ⅳ．諸学派とその論師」「Ⅴ．ナーガールジュナについて」「Ⅵ．真言乗について」の六章に分けられる。このうち「Ⅱ．菩提心詳説」を中心に菩提心の機能を考察した。中でも「Ⅱ－１．発心の因」「Ⅱ－２．発心の縁」「Ⅱ－１．２．菩提心の増大」は修道体系との関連で重要であり特に詳細に考察した。

ここに説かれるアティーシャの菩提心説とは，一言で言えば，アティーシャの修道体系そのものである。『道灯細注』の研究を通じて明らかにされているアティーシャの修道体系は，声聞乗，波羅密乗，真言乗を機根の差異によって理解し，それらを一丈夫の道次第として統合しようとするものであった。『開宝篋』でもアティーシャはそれと同じ立場に立つ。例えば，発心した者が菩提心を増大させるために必要な戒として波羅提目叉（prātimokṣa）を挙げたり，機根の鋭敏な者に対して真言乗を推奨したりすることにアティーシャのそのような立場がよく現れている。その修道体系を菩提心という観点から説いたのがこの『開宝篋』である。『開宝篋』で説かれるような，発心の因を備え，縁を得て発心し，その菩提心を摂受し，護持し，増大していくことは，そのまま道次第になるからである。『道灯細注』によれば，アティーシャの作った『発心律儀儀軌次第』（Cittotpādasaṃvaravidhikrama，D. 3969，4490，P. 5364，5403）はナーガールジュナ，アサンガ，シャーンティデーヴァに従っている。菩提心説に関するアティーシャの基本的な立場もこれと同様である。

二種の菩提心説のうち，シャーンティデーヴァから受け継ぐ誓願，出発の二種菩提心説は「Ⅱ－１．３．菩提心の功徳」で説かれる。誓願の菩提心は初発心時の心である。出発の菩提心は清浄な深い志向（śuddhādhyāśaya）であるという『道灯細注』の記述から初地以降のものであると考えられる。深い志向が清浄になるのは初地であるからである。勝義と世俗の二菩提心説については「Ⅰ．菩提心の必要性とその根拠」の中に関連する記述が見られる。アティーシャは勝義と世俗の二菩提心を一方では三昧という観点から区別し，また一方では世俗菩提心が勝義菩提心を生じせしめるというような段階的な区別をしている。三昧という観点から区別される勝義菩提心は，瞑想中に修習するものであるため，空性修習を意味しよう。それに対して，世俗菩提心とは慈悲を意味することになる。そのため「空である［勝義の菩提心と］大慈悲を本質とする

［世俗の］菩提心との二つを堅固にすべきである。」と説かれていたと考えられる。また，それから勝義菩提心が生じる世俗菩提心は，カマラシーラのいう世俗菩提心と等しく，誓願の菩提心である。この初発心から勝義菩提心が生じるまでの段階がＩ章において「世俗菩提心そのものが勝義菩提心を生じる」という段階的な構造をとって説かれていたのである。

以上がアティーシャの菩提心の構造であり，菩提心の機能的な側面の考察から「Ⅱ．菩提心詳説」の中の各項目とアティーシャの修道体系との関係も明らかにすることが出来た。「第七章『中観優波提舎開宝篋』和訳」(pp. 105-152)，「第八章『中観優波提舎開宝篋』テキスト」(pp. 153-210) に和訳とテキストを付した。

「第四章『発心律儀儀軌次第』について」(pp. 75-86)

アティーシャの菩提心説は，アティーシャの作った発心儀軌（『発心律儀儀軌次第』）を通して実践においても確認出来る。発心儀軌に説かれる七供養→三帰依→発心→受戒に至る次第はアティーシャの他の論書にも見られるものであり，「菩提心の増大」「菩提心を傷つけることと傷つけないこと」「発心の功徳」などは『開宝篋』に説かれるものと等しい。「第五章『発心律儀儀軌次第』和訳」(pp. 87－92)，「第六章『発心律儀儀軌次第』テキスト」(pp. 93-104) にそれぞれ和訳とテキストを付した。

論文審査の結果の要旨

本論文は，最後期のインド仏教に於てヴィクラマシーラ大学問寺の大上座をつとめ，後にチベットに招聘されて，いわゆる「後期仏教伝播期」のチベット仏教に大きな影響を与えたインド人学僧アティーシャ（Atīsa，982－1054，入蔵は1042）の菩薩行修道論の中心をなす「菩提心説」を解明するために，かれの主著の一つである『中観優婆提舎開宝篋』(Ratnakaraṇḍodghaṭa-nāma-Madhyamakopadeśa，以下『開宝篋』と略）並びに『発心律儀儀軌次第』(Cittotpādasaṃvaravidhikrama，以下『儀軌次第』と略）のチベット語テクストを校訂し，和訳し注解した上で，その「菩提心説」を論述したものである。

菩提心（bodhicitta）とは「菩提（悟り）に向かう心」と解釈でき，大乗の菩薩としての自覚に目覚めた修行者が，全ての苦しむ衆生を救おうと誓願して発心し，その心を向上させて邁進し，菩薩行に励む基礎となる心をいう。インド大乗経典運動の最初から，発菩提心儀礼は，最も中心的な仏教活動であったのであり，爾来，発菩提心儀礼こそが，あらゆる菩薩行の出発点であり，根本であった。４，５世紀頃に，瑜伽行派の『菩薩地』が，その発心儀礼を発達させて，菩薩戒の受戒儀礼へと増広したところから，菩薩戒を受戒した菩薩の菩薩行修道論としての五道――資糧道・加行道・見道・修道・究竟道――の体系が発達したのであった。そのような瑜伽行派の菩薩行修道論を受容しつつ，中観派は，漸次に独自の菩薩行修道論を発達させるが，それは，８世紀初め頃のシャーンティデーヴァの『入菩提行論』(Bodhicaryāvatāra）に至ってほぼ完成すると考えられる。このシャーンティデーヴァの『入菩提行論』が，二種の菩提心，即ち「誓願の菩提心」(bodhipraṇidhicitta）と「向上の菩提心」(bodhiprasthānacitta）によって菩薩行道の体系を説明するのである。そしてこの二種の菩提心が，シャーンタラクシタ（725－788）やカマラシーラ（740－795）などを経て，アティーシャへと継承されるのである。論者は，このような大乗仏教思想史における菩提心説の展開を踏まえた上で，アティーシャに於ける「誓願の菩提心」と「向上の菩提心」の二種の菩提心をシャーンティデーヴァやカマラシーラの立場と対比の上で，また，世俗菩提心と勝義菩提心という二種の菩提心をカマラシーラの思想と比較の上で明らかにしている。

本論文の最大の功績として以下の５点を指摘することが出来る。

先ず第一に，菩提心論を中心としてアティーシャの修道論が初めて体系的に明らかにされた点である。

第二に，本論文が『開宝篋』のチベット語テクスト全体の校訂本と和訳注を確定したことである。同書は従来研究者によって断片的に関説されることはあったが，その全体が明瞭な形で提示されたのは本論文が最初である。同書はサンスクリット原典が現存せず，チベット語訳でのみ伝わっているのであるが，本校訂本は現在入手可能なチベット大蔵経の全ての版本を参照して周到に準備されている。また，同書中には極めて多くの経典や論書が引用されているが，論者はそのほとんどを同定して注に示した上で明快な和訳を提示しており，文献学的に極めて質の高い研究となっている。本校訂本並びに和訳が今後のアティーシャ研究の重要な基礎となることは疑いがない。また，『開宝篋』に比べるとはるかに小品であるが，『儀軌次第』のチベット語テクストの校訂本と和訳注とを提出した点も大きな業績である。同書は発菩提心儀礼と菩薩戒の受戒儀礼

がどのようなプロセスを経て行われるのかを具体的に明らかにしている点で極めて興味深い貴重な資料である。

第三には，アティーシャの全著作の概観を提示したこと，を挙げるごとが出来る。これは今後のアティーシャ研究者に極めて有益な指針となることと思われる。

第四には，アティーシャとバヴィヤ（Bhavya）IIの『中観宝灯論』との間の密接な関係を再確認した点である。従来二諦論を根拠に両者の関係が指摘されることはあったが，論者は菩提心論の観点からこの点をより明確に論証することに成功している。

第五は，後代のチベット人著作家が用いる特殊な用語—例えば，「大中」（dBu ma chen po），「全ての中観論書の根本」（dBu ma'i gźuṅ thams cad kyi phyi mo）など—が既にアティーシャの論書に見出だされることを指摘した点である。用いられている文脈が後代のものとは少し異なるとはいえ，用語自体が既に11世紀のアティーシャの著作の中に見出だされることを指摘したことは文献学上重要な意味を持っている。

しかし本論にも問題点や不備な点がない訳ではない。例えば，二種の菩提心の内の「向上の菩提心」を論者は「出発の菩提心」と訳すが，原語 prasthāna は出発することよりはむしろ出発した後旅行途上にあることを意味するので「向上の菩提心」と訳す方が適切である。また，論者は，シャーンティデーヴァやカマラシーラに於ては「向上の菩提心」は「誓願の菩提心」の直後に続くのに対して，アティーシャに於て「向上の菩提心」は，「誓願の菩提心」の直後からではなく，それにつづく予備的修道段階（「資糧道」と「加行道」）を完成させた以後（したがって「資糧道」と「加行道」を含まずに），初地の「見道」を体得するところからはじまり，第二地乃至第十地の「修道」であると主張している。その論拠は，アティーシャのもう一つの主著である『菩提道灯』第75－79句に対する『道灯細注』に見られる一文であるが，同『細注』中にはそれを反証すると思われる文脈の文章も見出だされるため，今後，論者が『開宝篋』と『道灯細注』をより詳細に比較検討することによって，この問題を徹底的に吟味することを期待したい。また，本論文中には，インド大乗経典中に於ける菩提心の歴史について一言あるべきであった。さらに，『開宝篋』には密教に関する記述もかなり見られるが，論者は考察を顕教に於ける菩提心に限定したために，アティーシャの密教思想は全く考察外に置かれることになった点は惜しまれる。また，アティーシャの名前として，アティーシャ（Atīśa）とアティシャ（Atiśa）のいづれが適切か，という現在なお確定されていない問題を本論が立ち入って論じることがないのは残念である。『開宝篋』のチベット語校訂本の完成度が非常に高いのに対して，『儀軌次第』の校訂作業はやや不十分であり，現存する全ての版本を参照した上でのより完全な校訂本の作成が不可欠である。なお，完成度が高いとはいえ『開宝篋』の校訂本にも，いくつかの異読の選択になお改善の余地が見られる。また，『開宝篋』，『儀軌次第』の和訳は総じて正確で明快であるが，共に細部に若干の誤訳がないわけではない。しかしながら，これらの諸点は論者の今後の研究に待つべき問題であり，チベット蔵経にしか伝存しない難解な仏教哲学書のチベット語テクストを校訂し，和訳し注解を加えた上で論述した労作である本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1998年12月11日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。